「つながることの大切さと学校教育の役割」
～これまでの教員生活とコロナ禍の１年を振り返り～

奈良県立二階堂養護学校
校長　中川　貴明　氏

若草山を背景に薬師寺の塔が望める西の京養護学校（現：奈良東養護学校）で私の教員生活が始まり、以来３７年が過ぎようとしています。

初任地で初めて受け持ったＨくんとの出逢いは衝撃でした。見る物・聞く音に衝動的に反応し、毎日光のごとく教室や廊下を駆け回るＨくん…。そんな彼と私を繋いでくれたのは教室のオルガンでした。♪とんび（教採試験曲：この曲しか弾けません（笑））を弾き始めると、私に近寄り「ウオー、ウオー」と声を上げて飛び跳ねるＨくん。このオルガンが二人を結ぶパイプになって…１年がアッという間に過ぎ、そして、彼から学んだ多くの経験が私の教員生活の土台になりました。

「こんな子どもでも入学させてもらえるんですか？！」これは、新採３年目の春、体験学習の幼児保育担当をしていた私に発せられた参加保護者の言葉です。その言葉に「ドキッ！」としつつもどのような言葉でお母さんに応えたかは思い出せません。しかし、この衝撃的な言葉は今も記憶に残っています。我が子に「こんな子どもでも…」という言葉を発せざるを得なかった当時のお母さんの心情に直面し、まずは保護者の思いに寄り添うことの大切さ、そして障害のある子どもの就学の意味を真剣に学ぶ必要性を教えて頂いたかけがえのない経験でした。

やがて、知的障害教育校は児童生徒が急増し、ＨＲ教室不足による特別教室転用等、様々な工夫を繰り返しても追いつかない…の連続。そして、学校統合やみんなの願いと夢をのせた新設校づくりにも携わりました。その折々に、幾度となく意見交換をした保護者の方々、そして、一緒に汗を流した教員との出逢いと頑張りには感謝しかありません。そこにはいつも子どもを真ん中においた議論と取組があったと記憶しています。

このように長年にわたり子ども達や保護者の方々から数多くのことを学んできた教員生活の中、新型コロナウイルス感染症の影響により、コロナ禍に直面して 1 年が経過しました。緊急事態宣言による臨時休校、卒業生だけの卒業式、新入生だけの入学式、在宅教育、分散登校、そしてようやく学校再開、しかし、今もなお、コロナ禍での様々な制約が続き、これまで経験したことのない日常生活を送らなければなりません。本校では、臨時休校期間中も「居場所づくり」として子ども達を受け入れ、毎日 20 名前後の個別登校がありました。様々な事情のある中、子ども達の「居場所」の必要性を改めて認識し、そしてその居場所は「安心できる居場所」でなければならないことを痛感しました。保護者の方々も同様です。支援を必要とする子どもとご家庭にとって、学校とのつながりや心の居場所としての学校の存在意義を強く感じた日々でした。

手をつなぐ育成会のこれまでの歴史と取組は、まさに“人と人をつなぎ、居場所をつくり、そして共に支え合う”ことであったと思います。そして、教育関係者はその取組から数多くのことを学ばせていただき、共に歩を進めてきたと思います。

コロナ禍の今だからこそ、学校教育は今一度、このことを学び直し、肝に据え、つながることの大切さと居場所づくりを柱に据え、“子どもの命と人権を守り”、“子どもの発達・成長につながる教育を進める”ことに邁進する時であると考えます。

コロナ禍に直面したこの１年、正解のない判断と決断を求められながらも、“子どもの安全最優先”と“充実した学校生活の有り様”を探り続ける毎日です。これまでの出逢い・感動・学びを頂いた多くの子ども達、保護者の皆さん、関係者の皆さんには感謝しかありません。本当にありがとうございます。

“笑顔あふれる　暖かい春が　必ずやって来る”ことを信じて、共に知恵を出し合い、
心合わせて前に進みましょう。